マガキの浮遊幼生調査

カキ（マガキ）の養殖は、種ガキを確保することから始まります。種ガキとは、主に養殖ガキの産卵で生まれた浮遊幼生が、海中につり下げたホタテガイの殻を連ねた採苗器に付着したものです（写真）。種ガキの確保には、採苗器を海中につり下げるタイミングがとても重要です。

宮城県水産技術総合センターでは、安定した種ガキの採苗ができるように、カキの浮遊幼生調査を震災前から行っていました。しかし、宮城県では震災にともなう津波で親貝の多くが失われたため、産卵数が減少し、採苗に支障をきたすことが懸念されました。このため、水産総合研究センター東北区水産研究所は、震災後の一昨年7月から、宮城県水産技術総合センターと共同で本調査を実施しています（「FRANEWS」30号参照）。

2011年は14回、12年は6月から8月まで16回の調査を行い、結果はその日のうちに宮城県水産技術総合センターのウェブサイト（http://www.pref.miyagi.jp/mtsc/kankyo/yoshokutuho.html）に掲載され、漁業者の効率的な採苗作業に活用されました。

本調査の結果、採苗器を海につり下げる時期を判断する目安となる大型幼生（殻長250マイクロメートル＊以上）の出現のピークは、震災前に比べ、11年は早かったことが分かり（図1）、漁業者が行う採苗も8月上旬までには大部分が終了しました。一方、12年は、幼生の出現時期と数は震災前と同様で、採苗の終了も震災前と同様の8月中旬頃だったことから、今年も引き続き幼生の出現状況を確認するために調査をしていく必要があります。

宮城県における震災前の種ガキの生産量は年間約100万連で、その多くを県外に出荷し、全国のカキ養殖を支えていました（図2）。11年の宮城県における種ガキの生産量は震災前の約40％にとどまりましたが、昨年は震災前の約80％にまで回復しました。一方、昨年の宮城県におけるカキの生産量（むき身）は、震災直後の11年12月上旬同時期と比較すると約2倍に増えましたが、震災前の同時期と比較すると約10％で、まだまだ回復していません（宮城県調べ）。今後、種ガキの生産量が回復することで、私たちが食べるカキの生産量も徐々に回復していくものと期待しています。

写真．種ガキの確保（採苗）

（下は採苗器1連分。ホタテガイの殻72枚を針金で繋げたもので、これにカキの幼生を付着させる）

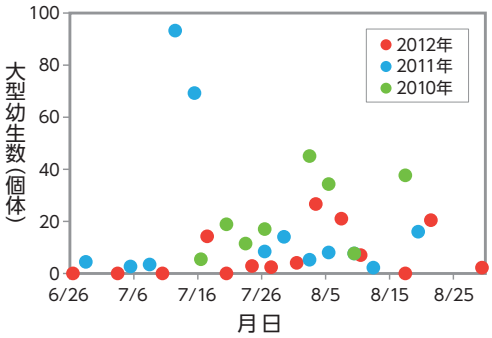

図1．観察された大型幼生数の年別の推移

（宮城県水産技術総合センターウェブページ資料から作成）

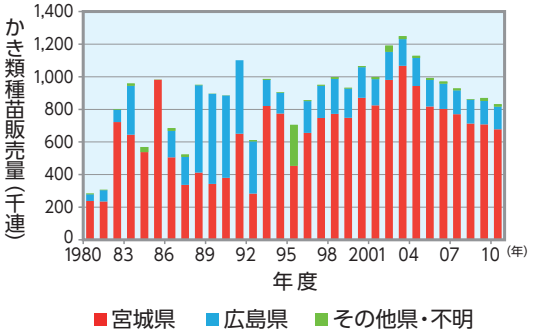

図2．県別のかき類種苗販売量（採苗器数）

（漁業・養殖業生産統計年報（農林水産省）から作成）

マガキの浮遊幼生調査の現場を取材しました。詳しくは22ページの「研究の現場から」をご覧ください。

＊マイクロメートル：1マイクロメートルは1ミリの1,000分の1の長さ